オプション教材（きょうざい）シオン　暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、**1**の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、**2**の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、**3**の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
・４週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

暗唱長文 小３ 7月　　母が四年生だったころ

1「あら、なつかしい。」
　母が声をあげました。おばあちゃんの家を改築することになって、荷物の整理に行ったときのことです。母の手には、手紙の束が握られていました。色とりどりの便箋や封筒、かわいらしいメモ帳の切れ端などがたくさん出てきました。

2「昔は、携帯やメールなんかなかったでしょう。だから、こんなふうに手紙を交換していたのよ。」
と母が言います。するとおばあちゃんが笑いながら、
「毎日学校で会う友だちともやり取りしていて、よくそんなに書くことがあるものだと思ったわ。」
と言いました。

3母は少し恥ずかしそうでしたが、私は見せてもらうことにしました。手紙のほとんどは、今でも家族ぐるみでつきあいのある母の同級生からのものです。特におもしろかったのは、四年生のときにダジャレに夢中になっていたころの手紙です。

4「大沢先生のおおさわぎ」「そんなシャレやめなシャレ」「体育行く？」
などと書いてあり、大沢先生らしい太った男の人のイラストがありました。さらに、
「真衣子、まーいい子。」
と母の名前を使ったダジャレもありました。

5そのほかに、秘密の手紙もありました。封筒の表書きに「真衣子へ。だれにも見せないでね」とあったので、私は少しどきっとしました。封筒の中には、色あせた水色のびんせんが入っていて、小さな字でぎっしりと文が書いてありました。

6私はそれを読みたかったけれど、母はこれはだめ、とさっとかくしてしまいました。私はきっと好きな子の話が書いてあるのだな、と思いました。私だってもう四年生だからわかるのになあ。

7おばあちゃんは、箱のほこりを払いながら、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「ママはね、小学生のころは、とてもおとなしかったのよ。授業参観に行ってもほとんど発言しないような子でね。」
と驚くようなことを言いました。今の母からは全く想像できません。

8「ねえねえ、いつから今みたいにうるさくなったの？」
と聞くと
「あなたが生まれてからかしらねえ。」
と、おばあちゃんが答えました。私は、人間って変わるものだなと心の中で思いました。母は知らぬ顔で、昔の本を束ねています。

9私は、もし子どものころの母と今、同じクラスだったら、私たち、仲良くなるかなあと考えました。なんとなく、好みも似ていそうだし、話も合いそうだなと思います。私は楽しくなってきて、
「おはよう、真衣子。」
と聞こえないようにつぶやいてみました。**0**

（言葉の森長文作成委員会　©）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

暗唱長文 小３ 8月　　いただきますの前に

1「あつっ。」

ぼくは、思わず指を引っ込めました。しかし、後ろを向いている母には気付かれませんでした。今夜は、ぼくの大好物の鳥の唐揚げです。あつあつの鳥が並ぶお皿から食欲をそそる香りが漂ってきます。

2ぼくは、思わず手を伸ばしてしまったのですが、揚げたてだったせいで、人差し指にやけどをしてしまいました。ぼくは何食わぬ顔で、そっと洗面所へ行き、指を流水で冷やしました。母は何も知らずに、揚げ物を続けています。

3その唐揚げは、ぼくが下味をつけるのを手伝ったのです。ショウガやニンニクをすりおろしたり、酒やしょうゆを入れたり、片栗粉をまぶしてなじませたりするのがぼくの仕事でした。だから、どんな味に仕上がったか確かめたかったのです。

4ぼくは、指が冷たくなるまで冷やすと、再びキッチンに向かいました。さっきの唐揚げは食べごろに冷めているはずです。のれんをあげて、テーブルに目をやると、

「あ、あれ？　ないっ。」

唐揚げのお皿はなくなっていました。

5「鳥を取り上げないでえ。」

とぼくは、言いそうになりましたが、がまんして、冷静にまわりを見渡しました。なんと、お皿は母の横のレンジ台に移動していました。ぼくは、まだ食べていないのにと心の中で叫びました。

6母はニヤッとして、菜ばしではさんだ鳥を振って油を切りながら、

「残念でした。」

と言いました。さらに、

「水ぶくれにならなかった？」

と聞きました。ぼくは、さっきのつまみぐい未遂を母は知っていたのだなあとあせりました。

7父もつまみぐいの常習犯です。会社から帰って、まずキッチンに直行し、テーブルの上をチェックします。そして、置いてあるものをひょいと口に入れてしまいます。すると、母が必ず、

「きちんと手を洗ってから！　うがいもしてから！」

と言うのです。

8父は、はいはいと言いながら洗面所に消えます。そんなときの父は、まるで叱られた子供のようです。父は何度も注意されているのに、堂々とつまみぐいをするところがぼくと違います。

9ぼくは、昨日うまい言い訳を考え付きました。つまみぐいを叱られたら、ママの料理があんまりおいしそうだからだよ、と言うのです。これなら見つかっても叱られません。しかし、「そんな言い訳していいわけ」と言われるかな。**0**

（言葉の森長文作成委員会　θ）

暗唱長文 小３ 9月　　国語、大好き

1「あっ、これ知ってる。」

テレビのコマーシャルに金子みすずさんの詩が流れました。私は、三年生のとき、国語の教科書で知ってから、みすずさんの詩をたくさん読みました。その中の一つが使われていたので、びっくりしたのです。

2私の好きな勉強は、国語です。どのくらい好きかというと、四月に新しい教科書をもらうと、一日で全部読み終えてしまうくらいです。国語の勉強は、新しい漢字をたくさん覚えるのも、いろいろな人の作品を読むのも、音読も、作文も、全部楽しくてたまりません。

3国語はまるで勉強ではなく趣味のような感じです。学校の授業が毎日、全部国語だったらいいのになあ、とよく考えます。

去年、母にそれを話したら、

「がんばって勉強をして、国語を専門に研究できる大学に行くといいかもしれないわね。」

と言ってくれました。

4そのとき、横で新聞を読んでいた父は顔を上げて、

「それまでは国語だけではなく、いろいろな科目の勉強もしっかりやるといいよ。国語以外の勉強が、国語の研究に役立つからね。」

と、私の方を向きました。5私はそれを聞いて、ようし、がんばるぞと思いました。

一年生のときから仲良しのはるかちゃんは、国語はあまり好きではなく、算数や理科の方が好きなのだそうです。私は、どちらかというと、算数は苦手です。6だから、いつもおたがい勉強でわからないところは教え合っています。

はるかちゃんは、読書があまり好きでないらしく、私がおもしろい本をすすめても、

「ええ。めんどうくさいなあ。これ、字が小さいし。」

などと言って、あまり読んでくれません。7私は逆に、数字がたくさん並んでいる算数の問題集を見ると、「わあ、めんどうそう。」と思ってしまいます。

そんなはるかちゃんですが、去年、「ちいちゃんのかげおくり」を国語で習ったときは、とても真剣に何度も読んだそうです。8二年生のときの「スイミー」もおもしろかったと言っていました。

だから、私は、将来国語の教科書を作る仕事をするようになったら、子供が興味を持つ話をもっとのせたいと思っています。

9私にとって、国語の勉強は、ご飯にたとえられます。ほかの教科は、スープやおかずやデザートです。国語の勉強をしっかりやると、きっと栄養もたっぷり、おなかもいっぱいになります。そんな気持ちで、私は、今日も国語の授業を聞いています。0

（言葉の森長文作成委員会　θ）